陸雲「兄への書簡」
――その文學論的考察――

釜谷武志
京都大學

西晉の文人陸雲（字は士龍、二六二―三〇三）には、一つ違いの兄である陸機（字は士衡、二六一―三〇三、晩年成都王穎に聘せられて平原内史となる）に宛てた三十餘通の書簡が「平原に與うる書」と題して現存している。陸雲はこの中で彼獨特の文學理論を展開していて、そのことはつとに劉勰（四六六？―五二〇？）が指摘しているし、また張溥（一六〇二―一六四一）の述べる所でもある。[1] にもかかわらず、從來あまり顧みられることは無く、ちなみに近人の文學批評史を幾つか見ても、わずかに朱東潤の記述があるのみで、郭紹虞、羅根澤、黄海章らはいずれも觸れていない。[2] そこで、殘された兄への書簡から、陸雲の文學觀の特質を探り、それに對していささかなりとも考究を加えようというのが、この小論の試みである。本論に入る前に、先ずテクストの問題をも含めて周邊の事象を一通り見ておこう。

一

陸雲の文集は『隋書』經籍志に「陸機集十四卷、〔注〕梁四十七卷、錄一卷、亡。陸雲集十二卷、〔注〕梁十卷、錄一卷、亡。」とあり、『四庫全書總目提要』に「當時所傳之本、已有異同。」と言うごとく、その頃からして既に寫本の異同があった。『晉書』卷五十四本傳に、機・雲それぞれ「著す所の文章凡そ三百餘篇、並びに世に行わる。」「著す所の文章三百四十九篇、又た新書十篇を撰し、[3] 並びに世に行わる。」『抱朴子』佚文（『意林』卷四）に「余（われ）二陸の文百卷（ばかり）許を見る」とあるのを信じれば、兄弟ともに元來は五十卷ずつの文集であったらしい、と想像できる。『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志は「陸雲集十卷」だが、王堯臣『崇文總目』は「八卷」と言う。南宋に入って慶元年間の一二〇〇年に、徐民瞻が機・雲各々十卷ずつ併せて『二俊先生文集』として刊行したのが、最初の刊本であり、これを明代の正德十四年（一五一九）に陸元大が飜刻した（＝四部叢刊本）。

書簡の總數は諸本によって異なり、四部叢刊本では三十五通のところを、梅鼎祚『西晉文紀』及びこれに據ったと思われる『百三家集』は三十八通、汪士賢の校本『漢魏六朝諸家文集』は三十四通にしており、排列や文字の異同も少なからずある。更に四部叢刊の底本である明刊本には錯簡があり、[4] 諸本は全てこの誤りを踏襲している。從ってここでは四部叢刊本『陸士龍文集』に據ることにして、嚴可均『全晉文』等を參照しつつこれを改める場合は、その旨を注記しておく。

ところで「與平原書」の七通目は、その最初の部分を見ても明らかなように、隔句ごとに脚韻を踏んでいる點、對偶表現を構成している點などからして、賦であると思われる。ところがこれと殆ど同じ文が陸雲の「南征賦」にあり、比較しやすいように兩者を上下に分けて掲げると次の樣になる。

爾乃使	……乃有
熊羆之士	熊羆之旅
虓闞之將◉	虓闞之將
雄聲泉踊	雄聲泉湧
逸氣風亮◉	逸氣風亮
超三軍以奔厲	超三軍以奔厲
賈餘勇以成壯◉	賈餘勇而成壯
兆洪音於寂寞	兆洪音於寂漠
先無聲而高唱◉	先無形而高唱
……	……

〔7〕　（本集卷一「南征賦」）

張溥はこの手紙だけを書の部類から除いており、その意味においては適切な措置と言えるが、彼は更にこれを獨立させて「羊腸轉賦」と題し、賦の類に入れている。民國の丁福保の排印本『漢魏六朝名家集』もそれに從っているが、誤りであろう。陸雲は書簡でたびたび自分の作品のことに觸れ、兄に添削や批評を請うている。思うに、七通目は恐らく「南征賦」の草稿であろう。手紙に同封して送付された作品の草案が、後に書簡として整理されたに相違ない。

陸雲の書簡は屢々「雲再拜、誨……」の形で始まっており、兄からの手紙に對しての返信と考えられる。しかるに

往復書簡のうち、陸機からの分は殆ど殘っていない。嚴可均が蒐輯した九條（『全晉文』卷九十七）も類書からの斷片にすぎず、文學を論じたものは稀であって、陸雲のとの對應關係は見出し難い。『晉書』卷九十二文苑傳に「初め、陸機入洛して、此の賦（三都賦）を爲らんと欲し、（左）思の之れを作るを聞き、掌を撫ちて笑い、弟の雲に書を與えて曰く、此の間倉父有りて三都賦を作らんと欲す。其の成るを須ち、當に以て酒甕を覆うべき耳、と。思の賦の出ずるに及んで、機は絶だ歎伏し、以爲らく加うる能わざる也、と。遂に筆を輟む。」というが、話としては面白いものの、陸機の入洛は太康末年（二八九）、「三都賦」の完成は二八二年までと考えられることから、(5) そのまま信じることはできない。

三十餘通の書簡が書かれた時と場所に關しては、それが小論の目的ではないので、少しく觸れておくにとどめる。陸雲が手紙の中で自分の作品、もしくはその草稿、例えば「歲暮賦」「愁霖賦」「喜霽賦」に言及している個所は多くて、同一の作品についての記述を見ると、逆に書簡の制作された時間的前後關係を推察することは、ある程度可能である。ほんの一例を示せば、「歲暮賦、甚だ之れを成さんと欲するも、自ら用う可からず。此の百數十字を得て、今送る。」（歲暮賦甚欲成之、而不可自用。得此百數十字、今送。）〔5〕と、「頃ろ哀思して、更に力めて歲暮賦を成し、適ま且に畢らんとするに、猶お未だ大いには定まらず。」（頃哀思、更力成歲暮賦、適且畢、猶未大定。）〔34〕を比較した場合、「歲暮賦」の一部分を書いたという五通目の方が、これをほとんど完成した時點での三十四通目に先んずるものであることは、明白だろう。

そうして、これらの書簡相互間の後先のみならず、それぞれが何時書かれたかも我々は推し測り得る。その際に主要な手がかりとなるのは、同樣に、陸雲の幾つかの賦である。というのは、幸運なことに賦の中には、その序に年代の記されているのがあるからだ。「余は京邑に祇役して、載ち離るること永久なり。永寧二年（三〇二）春、忝くも北郡を寵まれ、其の夏又た大將軍右司馬に鄴都に轉ず。」（「歲暮賦」序）「永寧二年（ここを三年に作るが、永寧二年十二

月で年號は太安に替っているので『初學記』の記載に從った。『全晉文』卷百注參照）夏六月、鄴都に大霖あり。」（「愁霖賦」序）「余は既に愁霖賦を作るも、雨亦た霽る。」（「喜霽賦」序）「太安二年（三〇三、機・雲は共にこの年に卒している）秋八月。」（「南征賦」序）。これらの作品に言及している書簡は、それゆえ、その年に、でなくても少なくとも晩年の數年間に書かれたと考えられる。また、一、二、三十通目は、陸雲が魏の曹操らの遺跡を歴訪して、遺品の有様を事こまかに兄に報じている。內容的に他の書簡と趣向を異にし、陸機の「弔魏武帝文」（二九八年作）と似かよっている。そこで、これら三通は、或いはこの年に制作されたのかもしれない。しかし、陸雲の「登臺賦」序に「永寧中（三〇一―三〇二）大府の佐に鄴都に參ず。時事を以て鄴都三臺に巡行す。高きに登りて感ずること有り、因りて以て崇替を言い、廼ち賦を作りて云う。」とあり、書信中に「鄴都」「淸河」の文字が見えることから、淸河國赴任（注5に揭げた姜亮夫の書八十五ページに據ると三〇二年）の後、鄴都での作、卽ち三〇二年に書かれたという可能性も大きい。

書簡の制作時期の決定については、主に陸機の「文賦」の制作年代考證のために書かれた論文が、それを副產物としてもたらしている。陳世驤「陸機の生涯と『文賦』制作の正確な年代」（一海知義氏譯『中國文學報』第八册）は、「文賦」をはじめとする六篇の賦への批評を含む、陸雲の八通目の書信が、三〇〇年の後半に書かれた、という。更にこの論文を讀むと、逯欽立氏が『學原』第二卷第一期（一九四八）揭載の論文で、三十五通の手紙のうち十六通（一年後更に二通を追加）は、全部三〇二年に書かれたものであると論證されたことが知られる。ただ、逯氏の論文を閱讀できなかったのは甚だ殘念である。

一聯の手紙が晩年の數年間に出されたと措定して次に進もう。この頃に機雲兄弟はそれぞれ何處にいたのだろうか、という問題についてであるが、こちらの方はどうも漠としている。二人の官位に關して確實に言えることは次の通りである。三〇〇年：陸機は趙王倫により相國參軍となる。三〇一年：陸機は中書郎になり、陸雲も中書侍郎になっている。三〇二年：陸機は成都王穎により大將軍の參軍、そ

して平原内史に、陸雲は清河内史、そして大將軍右司馬になる。ここで『世說新語』賞譽篇に「蔡司徒は洛に在りしとき、陸機兄弟の參佐廨中の三間の瓦屋に住まいしに見えり。士龍は東頭に住まい、士衡は西頭に住まえり。」とあるのを信じると、三〇〇年から翌年にかけて陸機・陸雲は洛陽で一緒に住んでいたことは確からしい。もっとも陳氏によれば（前掲論文七十六ページ）、三〇一年の秋から三〇三年の秋までが、二人が別々にいた唯一の時期である、という。

假りに兄弟がそろって洛陽に住んでいたとしても、同じ家でさえなければ、勿論手紙のやりとりがあってもおかしくはない筈だし、その意味では、住まいが同一であったとの確證がない限り、年代や場所の細かい決定はきわめて流動的であろう。

また、兄以外の友人、楊彥明、車茂安らに與えた手紙も現在まで傳わっており、本集卷十に三十七通收錄されている。そこから二通を選び、「與平原書」の第二十七通目と見較べてみよう。

陸雲「兄への書簡」（釜谷）

「雲頓首頓首。惟夏始暑。願府館萬福、疾病處遠。人信希少、情問闕替。中間曠年、瞻慕敬想、興言反側隆敦。比辱慰誨、銜抱豐眷、以增愚迹、不勝勤企。謹及君之書、不以備。」

（「與戴季甫書」全七首、其一）

「雲白。欽明去書不悉。彥先來、得書以爲慰。時去再荏、歲行復半。悲此推移、終然何及。漸已欲熱、想自如常。悠悠守限、良談未日。眇然東望、思以敍至。及反慣罔不多、行矣愛德、往來相聞。」

（「與楊彥明書」全七首、其一）

「雲再拜。一日視伯喈祖德頌、亦以述作宜褒揚祖考爲先。聊復作此頌、今送之。願兄爲損益之。欲令省、而正自輒多、欲無可如省。碑文通大悅愉有似賦。愚謂小復質之爲佳。前作此頌書之、行欲遣信以白兄。昨聞有賦消息、愁憒無賴、既冀又然、又已成書、聯以付信耳。尋得李寵勸封禪草、信自有才、頗多煩長耳。今送。間人又有張公所作、已令寫別送。臨紙罔罔、不知復所言。謹啓。」

〔27〕

ここにほんの一端を垣間見たにすぎないけれども、それ

でもなお、割合整然とした四字句の連續がしかと認められ、兄に宛てた書簡の句讀の施しにくさとは、少なくとも表面上顯著な隔りがある。それだけに、兄に對する親近感とは異質の、いくぶん餘所よそしい印象を感じさせる文體でもある。今ひとつ興味深いのは、その內容である。身邊の瑣事や心中の感懷を記した、ありきたりともいえるこれらの書簡は、文學についての記述はあまり見當らず、「與平原書」が文學色一色で濃厚に塗り潰されているのと好對照をなして、文學に關する彩色はごく控え目に、生地をそのままに見せている。こうした形式面、內容面における雙方の差異から、兄への書簡の特異性がかえって際立って浮かび上がってくるように思われる。

二

以下、前代の文學者に關する陸雲の記述を具體的に見ていきたい。

先ず、後漢の蔡邕（一三二―一九二）について、

「茂曹碑は、[6]皆自ら是れ蔡氏の碑の上なる者なり。蔡氏の數十の碑を比べ視るに、殊に及ばざるもの多く、言も亦た自ら清美なり。」

（茂曹碑皆自是蔡氏碑之上者。比視蔡氏數十碑、殊多不及、言亦自清美。）〔11〕

「蔡氏の長ずる所は、唯だ銘・頌耳。銘の善き者は、亦た復た數篇、其の餘は平平なる耳。兄の詩・賦は自ら與に域を絶し、當に稍與に比校すべからず。」

（蔡氏所長、唯銘頌耳。銘之善者、亦復數篇、其餘平平耳。兄詩賦自與絶域、不當稍與比校。）〔19〕

これらを一見すれば明らかなように、陸雲は彼をあまり高く評價していない。卽ち、前の例では、兄の書いた「茂曹碑」は蔡邕の碑よりもまさっていて、その言辭も淸らかで美しい、と評し、後者では、蔡邕が秀でているのは銘と頌だけであって、しかもそのうち佳作は數篇にすぎない、それにひきかえ兄の詩賦の卓越さは他との比較を絶するほどだ、と言っているのである。

ところが、ふつう蔡邕は「蔡邕の銘思は、獨り古今に冠す。」（『文心雕龍』銘箴篇）「後漢自り以來、碑碣雲のごとく

起る。才鋒の斷ずる所、蔡邕より高きは莫し。……其の事を敍する也該にして要、其の采を綴る也雅にして澤なり。清詞轉じて窮らず、巧義出でて卓立す。其の才爲るを察するに、自然にして至る。」（同、誄碑篇）と、碑や銘の分野では他者の追隨を許さぬ第一人者と見なされている。陸雲により近い時代に生きた摯虞（？―三一一）の評價も亦た然りである。「夫れ古の銘の至って約にして、今の銘の至って煩なるは、亦た由有る也。質と文は時に異なれば、則ち既に之れを論ず矣。……蔡邕の楊公の爲に作りし碑は、其の文典正にして、末世の美なる者也。」（『文章流別論』、『太平御覽』五九〇引）

自ら「銘論」を著し、しかも『文選』に「郭有道碑文」「陳太丘碑文」を收められる程の碑銘の名手蔡邕に對して、それでは一體なぜ陸雲はこのように低い評價しか與えていないのだろうか。思うにそれは、碑や銘というジャンルにおける代表者としての蔡邕を認めつつ、なおそれを上回るものが存在することを言いたいが爲の表現ではないだろうか。つまり、恐らく當時の世評として、銘文や碑文においての蔡邕の名聲は、すでに高まっていたのであって、作品の優秀性を示すひとつの好例として陸雲はそれを引きながら、一層すぐれたものへの讃揚を倍加しているのだと考えられよう。そして讃辭の向けられている對象は、兄の陸機の碑文や詩賦であることがわかる。

同樣のことが、後漢末のいわゆる建安七子の一人である王粲（一七七―二一七）を評した文についても言える。

「登樓は名高く、恐らくは未だ越ゆ可からざる爾。」

（登樓名高、恐未可越爾。）〔18〕

「仲宣の賦集を視るに、初征・登樓賦は卽ち甚だ佳なるも、(7) 其の餘は平平なり。情を言い得ざる處、此れ賢文の正に自ら茂ならざらんと欲す。兄爾りと呼うや不や審らかならず。」

（視仲宣賦集、初征登樓賦卽甚佳、其餘平平。不得言情處、此賢文正自欲不茂。不審兄呼爾不。）〔31〕

王粲（仲宣）の「登樓賦」は名立たる秀作で、これほどの名作を凌駕する作品はとても書けそうにない、という陸雲の述懷〔18〕や、王粲の賦集を熟讀したところ、「初征賦」

「登樓賦」は大變良いけれども、その他の賦は凡作だ、といった批評〔31〕を見る限りでは、王粲の作品全般に關してはいざ知らず、少なくとも「登樓賦」について最高級の譽めことばを與えていることだけは確かなようである。しかしながら、次の様な批評例もまた確かにある。

「仲宣の文は、兄の言の如く、實に張公の力を得たり。(8)子桓の書の如きも、亦た自ら乃ち之れを重んぜざらんや。兄の詩は多だ其の思親に勝る耳。登樓賦は乃ち煩なること無からんや。感丘賦・弔夷齊は辭偉と爲さず。(9)兄の二弔は自ら之れより美なり。」

（仲宣文、如兄言、實得張公力。如子桓書、亦自不乃重之。兄詩多勝其思親耳。登樓賦無乃煩。感丘賦弔夷齊辭不爲偉。兄二弔自美之。）〔12〕

王粲の文章は、今の時代でたとえればまことに張華（二三二―三〇〇）のごとき力量を具備していて、曹丕の書簡(10)でも彼を重んじている、と一應は譽めておきながら、反轉してだが兄の詩は王粲の「思親詩」に遙かに勝っている、というのだ。更に「登樓賦」「感丘賦」「弔（伯）夷・（叔）齊文」よりも陸機の「弔蔡邕文」「弔魏武帝文」の方がすぐれていると言う。前の二つの例〔18〕〔31〕では明らかに「登樓賦」の優秀さを充分に認めているのだが、ここでは、やはり兄の方が上なのだ、と明言している。ついでに言うと、「初征・登樓賦は卽ち甚だ佳なるも、其の餘は平平なり。」は、先程の蔡邕についての論評「銘の善き者は、亦た復た數篇、其の餘は平平なる耳。」と同じ表現パターンを用いている。この場合「それ以外は凡庸だ」というのは、とりもなおさず「それ」の卓越さを證言しているわけであるし、同時にまた「それ」に匹敵する何か、もしくは「それ」以上の何かが次に提示されることの含みを預感させる、論理の前提部分にもなっている。

それでは、陸機に劣る要因となる王粲の作品の缺點は、どういうところにあると言うのか。陸雲によれば、感情を十全に言い盡くせていない點〔31〕、表現がすぐれない點〔12〕などである。だが、こうした指摘は我々にはいささか奇異にうつる。何故なら、次のような評價が通常大勢を占めているからである。いわく、「仲宣は續いて自ら辭賦に

善く、惜しむらくは其の體弱く、其の文を起すに足らざるなり。善くする所に至りては、古人も以て遠く過ぐること無からん。」（曹丕「與吳質書」）、「仲宣は才に溢れ、捷にして能く密なり。文は兼ねて善くする多く、辭は瑕累少なし。其の詩賦を摘すれば、則ち七子の冠冕乎。」（『文心雕龍』才略篇）、「其の源は李陵に出ず。愀愴の詞を發し、文は秀ずるも質は羸し。曹（植）・劉（楨）の間に在りて、別に一體を構う。陳思に方ぶれば足らず、魏文に比ぶれば餘有り。」（鍾嶸『詩品』上）と。いずれも均しく、表現は缺點が無く優れるが、むしろ内容面において本質的な個性の脆弱さがあると評している。すると、感情をうまく結實させ得ていない、と表現の拙さを指摘する陸雲の評價は、やや的を逸した獨斷の氣味を免れないのだろうか。いや、あながちそうだとは斷言できないようである。ここに掲げた三番目の例で鍾嶸が「愀愴の詞を發し」と評している點に着目し、そして、謝靈運（三八四―四三三）がその「擬魏太子鄴中集詩」（『文選』卷三十）王粲の項の序で「家は本秦川の貴公の子孫、亂に遭いて流寓し、自ら傷む情多し。」と述べているのを併せ考えると、陸雲の王粲評の方向も少しは妥當性を帶びてくるのではないだろうか。更に「王仲宣の詩は、跌宕に足らず、眞摯に餘有り。亂を傷むの情は、小雅變風の餘也。子桓兄弟とは、氣體本より殊なり、相比ぶるに緣無し。」という清人の批評[11]を擧げ得よう。かなりの誇張をしつつ補足的な說明を附け加えるとすれば、王粲の作品には感傷に過ぎるところがあって、沈痛な響きが強く前面に押し出されて全體を覆っているために、陸雲は哀傷過多の印象を覺えて、感情がうまく表現に結びついていないと判斷したのではないだろうか。

試みに「登樓賦」（『文選』卷十一）からその一部を拔書しよう。

登茲樓以四望兮　　茲の樓に登りて以て四望し
聊暇日以銷憂　　聊か暇の日に以て憂いを銷す
……　　……
雖信美而非吾土兮　　信に美しと雖も吾が土に非ず
曾何足以少留　　曾ち何ぞ以て少しく留まるに足らんや

遭紛濁而遷逝兮　紛濁に遭いて遷り逝き
漫踰紀以迄今　漫らに紀を踰えて以て今に迄る
情眷眷而懷歸兮　情は眷眷として歸らんと懷い
孰憂思之可任　孰か憂思に之れ任う可き
……　……
風蕭瑟而並興兮　風は蕭瑟として並び興り
天慘慘而無色　天は慘慘として色無し
獸狂顧以求羣兮　獸は狂顧して以て羣を求め
鳥相鳴而擧翼　鳥は相鳴いて翼を擧ぐ
原野闃其無人兮　原野は闃として其れ人無く
征夫行而未息　征夫は行きて未だ息まず
心悽愴以感發兮　心は悽愴として以て感發し
意忉怛而憯惻　意は忉怛として憯惻す
循堦除而下降兮　堦除に循いて下降すれば
氣交憤於胸臆　氣は胸臆に交憤す
夜參半而不寐兮　夜は半に參るも寐ねず
悵盤桓以反側　悵として盤桓して以て反側す

と、異鄕に在る自己の胸の裡を切々と綴っていて、これを讀めば、感傷過剩だという見方も首肯できる。

ここで、陸雲が一方では盛んに稱揚している「登樓賦」を、マイナスの價値の方向に論斷する場合、「乃ち煩なること無からんや」卽ち、くだくだしい、と評している點に着眼したい。これは、先の蔡邕にまさる兄の「茂曹碑」を、プラスの方向にあるものとして、「淸美」という術語を用いて評價していたのと相通じており、兩者はいわば表裏一體の關係にある。換言すれば、淸らかな簡潔さが、批評に際しての陸雲の基準としてあることが窺われるのである。

三

それでは、蔡邕や王粲にまさるという兄の陸機について、陸雲はどう考えていたのだろうか。それを次に見ていこう。

「兄の文章は已に自ら天下に行われて、多少在る所無からん。」

（兄文章已自行天下、多少無所在。）　〔3〕

「兄の文章の高遠絕異なるは、復た稱して言う可からず。」

（兄文章之高遠絕異、不可復稱言。）　〔11〕

「古今の能く新聲絶曲を爲す者も、又た兄を過ぐること無し。……兄の文章は已に一世に顯われて、亦た復た多く自ら困苦するに足らず。」

（古今之能爲新聲絶曲者、無又過兄。……兄文章已顯一世、亦不足復多自困苦。）〔21〕

兄の文學はすでに一世を風靡していて、その比類なき偉大さについては、陸雲自身いまさら言を費やすには及ばない程であり、しかも古今を通じていかにすばらしい作品を創る文人にも、決して兄を超える者はいない、とさえ言う。恐らくこれ以上の言葉は考えつかないであろう、讃辭の限りを盡くしている。この他にも、前漢の賈誼（前二〇一？―前一六九）と比較して、

「兄の作は必ず自ら昔人より相去り、辯亡は則ち已に是れ過秦の對事なり。當を求めて得可き耳。」

（兄作必自與昔人相去、辯亡則已是過秦對事。求當可得耳。）〔10〕

のような例がある。劉勰は「陸機の辨亡は、過秦に效いて及ばず。然れども亦た其れ美なり。」（『文心雕龍』論說篇）と、その立派さを認めつつも、陸機の「辨亡論」は賈誼の「過秦論」に及ばない、と明言しているのに對し、陸雲はといえば、前者は後者に優に匹敵し、雙方が對等の關係にあると言って憚らない。このように、少なくとも陸雲にとっては、兄が最大の文學者だ、と意識されていたのである。むろん例外も決してない譯ではなく、兄の作品に對して否定的見解を示すところも、少なからずある。その點において、陸機（及び陸雲）へのほとんど盲目的とも言うべき、葛洪（二八三―三六四）の一方的な評價[12]とは、類を異にする。

「古今の兄の文の未だ與に校ぶることを得ざる者は、亦た惟だ兄の道う所の數都賦耳。其の餘は小しく勝負有りと雖も、大都自ら皆雌爲る耳。張公父子亦た雲に語えらく、兄の文は子安に過ぐるも、子安の諸賦、兄復た皆は過ぎず。其の便可なるは、與に供論せざる可けんやと。雲謂うに、兄二京を作らば、必ずや疑い無きを得ん。久しく兄に爲ることを勸むる耳。[13]」

（古今兄文所未得與校者、亦惟兄所道數都賦耳。其餘雖有小勝負、大都自皆爲雌耳。張公父子亦語雲、兄文過子安、子安

諸賦、兄復不皆過。其便可、可不與供論。雲謂兄作二京、必得無疑。久勸兄爲耳。）〔19〕

兄が言うところの「數都賦」にだけは劣る、とはっきり述べている。これは多分、かの洛陽の紙價を貴からしめたといわれる左思の「三都賦」を指すにちがいない。續いて陸雲は、張華父子の言葉を引いて、兄の文學は成公綏（子安）よりまさっているが、綏の賦[14]の中には陸機の及ばないものもある、という說を紹介し、自分はこの意見に贊同しないと結んでいる。ただ、その次で、兄に「二京賦」を作ってこの疑いを晴らすべく、さかんに勸奬していることを考慮に入れるなら、或いは陸雲自身、張華父子の見解にや思い當るふしがあったのかもしれない。殊に別の個所の、

「近日子安の賦を視て、亦た之れに對して絕だ工みなるを歎息せり。兄の誨えも又た爾り。故より自ら是れ高手なり。」

（近日視子安賦、亦對之歎息絕工矣。兄誨又爾。故自是高手。）〔18〕

を參照すれば、その感を尙一層强くせざるを得ない。

ともあれ、こういった例外を散見できるとはいうものの、やはり、兄は古今に冠絕する最大の作家である、と絕讚に近い最高の評價を向けていることに變りはない。陸機の個個の作品に對する賞讚をもう少し詳細に見ていくと、

「祠堂頌は已に得たり。……前後して兄の文を讀むこと、一再過なれば便ち口語に上るも、此の文を省るに、未だ大いには精ならずと雖も、然れども了く識る所無し。然れども此の文は甚だ自ら難し。事は同じくして又た相似たるも、益ます古ならず、皆新綺なり。此れを用て已に自ら洋洋爲る耳。」

（祠堂頌已得。……前後讀兄文、一再過便上口語、省此文、雖未大精、然了無所識。然此文甚自難。事同又相似、益不古、皆新綺。用此已自爲洋洋耳。）〔4〕

ふつう陸雲は兄の作品を何度か讀めば、もう口をついて出てくる程なのだが、この「祠堂頌」はできぐあいが芳しくなくて、あまり詳しく讀んだわけではないけれど、それでもやはり記憶には殘っていない。ただ、そこに書かれている事がら、對象は同じであっても、古さは感じられずむ

しろ斬新であって、その點ゆえに立派な作品たり得ているのだ。

「述思賦の流を省るに、深情至言、實に清妙爲り。……漏賦は清工と謂う可し。兄頓に爾く多くの文を作り、而も新奇なること乃ち爾り。眞に人をして怖れ令め、當に復た文を作るを道うべからず。」

（省述思賦流、深情至言、實爲清妙。……漏賦可謂清工。兄頓作爾多文、而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。）〔8〕

「弔蔡君は清妙にして言う可からず。漢功臣頌は甚だ美なり。恐らく弔蔡君は故より當に最爲るべし。」

（弔蔡君清妙不可言。漢功臣頌甚美。恐弔蔡君故當爲最。）〔9〕

「述思賦」は感情を盡くし表現を窮めた清らかな絶品であるし、「漏刻賦」も清らかでたくみだ。短期間でこれほど多くの作品を創り、その上それらがこぞって斬新さに溢れているとあっては、自分はもはやこれから文學について語れない、と陸雲は慨歎している。「弔蔡邕文」も清妙で、文句のつけようがない。最高傑作に數えあげても當然だ。

陸雲は一様に、その表現が巧みで美しいと言い、「清妙」「清工」の評語を使って、清らかなたくみさを指摘している。そして、その巧みな美文は、新しさと切り離し得ぬ關係にあることがわかる。陳腐な表現、使い古された言い回しではなく、新奇さの裏打ちがあってこそ、始めてすぐれた文學たり得るのだ。陸雲自身の言葉を借りれば、「新奇無くして、體力は甚だ困瘁する耳。」（無新奇、而體力甚困瘁耳。）〔16〕とでも言おうか。獨創性が無いと、全體がダイナミックな力感に缺けてしまって、衰憊しきったものになるのである。陸雲にとって新奇という概念は、文學におけるひとつの要諦なのである。從って、新しさを感じさせない表現は、必然的にマイナスの評價を受けることになる。兄の作品もその例に洩れず、

「兄の文を省るに、復た稍常に佳なりとは論ぜず。然れども了く出語を見ざるは、意謂らく兄の文の休き者に非ずと。」

（省兄文、不復稍論常佳。然了不見出語、意謂非兄文之休者。）

〔4〕

「劉氏頌は極めて佳なり。但だ出言無き耳。」

（劉氏頌極佳、但無出言耳。）

〔5〕

のごとく、批判を受け入れる餘地を殘している。「出語」は、作品全體の中でキラリと光り輝く、いわゆる「一篇の警策」（「文賦」）の謂いであると同時に、もっと廣汎に、これまでは見られなかったような新しさを感じさせる言辭、という意味をも包攝していよう。かくのごとき新奇さを伴わないような作品は、當然のことながら、妙なるもの、工（たく）みな作とは言い難いのである。

さて、陸機の「文賦」は、形而上的な思索を凝らした、作家自身の創作體驗に基づく文學論であるに加えて、賦の形式を借りながら、それをも含む文學全體を論究した點で、魏晉を代表する獨特の作品であることは、よく知られている。それゆえ、弟の陸雲がこの「文賦」をどのような觀點から把捉していたかは、きわめて興味をそそられるところであるのだが、殘念なことに我々の期待は、見事にかわされてしまう。「文賦」に對して彼は、その內容には立ち入らず、專ら、賦という一個の文學作品として技巧の方面から批評する。

「文賦は甚だ辭有り、綺語頗る多し。文適（も）し多ければ、體便ち清ならざらんと欲す。兄爾りと呼（い）うや不（いな）や審らかならず。」

（文賦甚有辭、綺語頗多。文適多、體便欲不清。不審兄呼爾不。）

〔8〕

「文賦」は表現が非常に豐かで、きらびやかな言葉がやや多すぎるようだ。華麗な表現技術が多ければ、全體として調和のとれたスタイルに、すがすがしさが缺如してしまうのではないだろうか。陸雲はこういった少し批判めいた論評を下している。ここで注目しておきたいのは、美しく華やかな裝飾語が多いことに對する、いくぶん否定的な見方が顯現している點である。兄の文學を低く評價する場合、おしなべて彼はその表現過多を擧げている。少なからずあるそれらの例から、幾つかを次に拾ってみよう。

「二祖頌は甚だ高偉と爲す。……然れども意に故より復た之れを微（や）や多しと謂（おも）う。民は歎くことを輟めずの一句

は、省く可きと謂う。」

（二祖頌甚爲高偉。……然意故復謂之微多。民不輟歎一句、謂可省。）〔5〕

「兄の文は方當に日に多し。但だ文は實に多きを爲すに貴ぶこと無し。多くして兄の文の如き者は、人其の多きを醫わざる也。屢しば諸を故時の文に視ぶるに、皆文體爾きと成るに恨み有り。」

（兄文方當日多。但文實無貴於爲多。多而如兄文者、人不醫其多也。屢視諸故時文、皆有恨文體成爾。）〔18〕

「兄の丞相箴は小しく多く、女史の清約なるに如かざる耳。」

（兄丞相箴小多、不如女史清約耳。）〔22〕

「二祖頌」は確かにすぐれた傑作ではあるけれど、やや多辯すぎるように思われる。「民は歎くことを輟めず」の一句は省略した方がいいと考える。〔5〕 兄の文章は近ごろは饒舌になったが、文というのは多辯であってはよくないのだ。とはいうものの、兄ほどの文であれば、その多辯さもさほど氣にはならない。以前の文章と比べてみることがしばしばあるが、近ごろの文にはこのような弊があるのが殘念だ。〔18〕 「丞相箴」は少しく多辯で、張華の「女史箴」の清らかでつづまやかなのに及ばない。〔22〕 それぞれの概要を略述すればこの様にでもなろうか。なお、二番目の引用で「多くして兄の文の如き者は、人其の多きを醫わざる也。」とあるのは、一見兄の多辯に好意的な表現に見えるが、實は兄に饒舌をカバーする長所があるから辛うじて救われるものの、そうでなければ辟易してとても見られたものではない、というのが陸雲の本音であろう。そして、陸雲が文學において多辯を排し、簡潔を宗としていることは、もとより言うまでもない。いみじくも最後の例〔22〕で「多」と「約」の二つの對立概念を使って斷言しているではないか。

陸機の文學が多辯に過ぎていたことに關聯しては、「孫興公云えらく、潘（岳）の文は淺にして淨、陸の文は深にして蕪なり、と。」（『世說新語』文學篇）や「機の善く文を屬るや、司空張華其の文章を見て、篇篇善しと稱うるも、猶お其の文を作るの大いに治なるを譏り、謂いて曰く、人の文

を作るは不才を患うるに、子の文を爲るに至りては乃ち太だ多きを患うる也、と。」（同、劉孝標注引『文章傳』）のごとく、彼の生きた晉代において早くも張華や孫綽が、或いは揶揄の氣持をこめて、或いは潘岳の清淨さと對照しつつ述べた、という話が傳わっている。とりわけこういった兄の難點を陸雲が嫌っていたことは、既に書いた通りである。ただ、そのごたごたした煩長すぎる文も、清新な感覺の裏附けがあるから救われるという、次に引く陸雲の指摘は、兄弟としての配慮が拂われている點[15]を割り引いても、缺點を救うものとしてすっきりした新しさを擧げているだけに、やはり留意しておくべきであろう。

「兄の文章、……然れども猶お皆微や多からんと欲す。但だ清新相接すれば、此を以て病と爲さざる耳。」

（兄文章……然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳。）〔11〕

ところで、基本的に簡潔さを尊重している以上、それはいきおい、作品全體の分量、卽ち長さの問題にまで及んでくる。

「文を作るに唯だ多きを尚び、家に猪羊多きの徒有り。蟬賦二千餘言、隱士賦三千餘言を作る。既に藻偉の體無く、都て自ら事に似ず。文章は實に自ら當に多かるべからず。」

（有作文唯尚多、而家多猪羊之徒。作蟬賦二千餘言、隱士賦三千餘言。既無藻偉體、都自不似事。文章實自不當多。）〔21〕

「吳書は是れ大業にして、既に不朽に垂る可し。……此の七卷、復た增すを望む意無し。文章を作らんと欲すれば、六七紙卷あれば十分なり。……文章は誠に多きを用いず、苟くも卷ごとに必ず佳ければ、便ち此を謂いて足れりと爲す。今見るに已に四卷に向とし、五十に比びて成るを得可し。」

（吳書是大業、既可垂不朽。……此七卷無意復望增。欲作文章、六七紙卷十分。……文章誠不用多、苟卷必佳、便謂此爲足。今見已向四卷、比五十可得成。）〔24〕

ここに記した例で興味深く感じられるのは、數量的な簡約さを明らかに重視している所である。文學作品を作る場

合、ただ長篇であればそれで事足れりとする考えを、二千語、三千語という具體的な數字をたとえに擧げながら、陸雲は嚴しく戒めている。彼の說く所によれば、それらは均整のとれた文體としての美しさを缺くばかりでなしに、對象とする事物からも遠くかけ離れたものに墮してしまうのである。こうなればもはや長大さは、その作品の誇るべき取柄でなくなるどころか、却って繁雜さと相俟って作品の價値を大幅に低下させるのみである。いたずらに長さや豐富さを競う作品を峻拒し斥けた陸雲は、より積極的には、できるだけ短く簡潔な作品を高く評價する。陸機が書きつつある『吳書』[16]の一部分を評して、もうこれ以上增大させる必要など無く、文を書こうとする際は、六卷或いは七卷の分量があればそれで十分だと言う。にもかかわらず、既に四卷增に及ぼうとし、五十卷を費やしてやっと完成しそうな氣配なのはもってのほかだと語氣を强める。「文章」は「誠に多きを用いず」であり「實に自ら當に多かるべからず」なのである。こうした例は、陸雲が單に部分的に簡潔な表現を尊重していたにとどまらず、廣く全體としての數量的な面においても簡約さを重視していたことを示唆する恰好のものであろう。冗長で散漫な表現、くだくだしい美辭の羅陳とは對蹠的に、でき得る限り無駄を切りつめ、簡にして要を得た表現こそが、陸雲の最上とするものであったのだ。

「張公の文は他異無く、正に自ら清省にして煩長無し。[17]文を作るに正に爾らば、自ら復た佳なり。」

（張公文無他異、正自清省、無煩長。作文正爾、自復佳。）〔21〕

と、彼自ら言っている。

以上に述べてきた事から、陸雲にとっては文學批評の基準として、きよらかですがすがしい「清」という概念のあったことがわかる。（「清」の附いた術語がプラスの價値評價の際に頻用されていた事實を想起しよう。）やや圖式的に言えば、根柢に「清」なる概念があって、それが量的には「簡約さ」を貴ぶという形で、そして質的には「新しさ」を貴ぶという形で表われているのではないだろうか。蛇足になるのを恐れずに敢えて言うならば、陸雲は作品を反價値的に評す

る場合、「煩雑すぎる」とか「新奇さがない」と言っているけれども、「簡約すぎる」とか「典雅でないから」と言った例しは、まず見當らない。つまり、「新しさ」「簡約さ」は常に誤つことなく、積極的評價の正（プラス）の方向に向かっているのであって、これら二つを質と量の座標軸に沿って溯源すれば、「清」という原點に收斂するのである。

四

「清」なる語が、單に文學批評において使われるのみならず、文學作品全般にわたって用いられていることは、もとより言うまでもあるまい。更に魏晉六朝という時代にあってその使用例が數多きに及び、しかも特徴的であるのは、いわゆる正史の列傳の人物評價においてである。以下、思いつくままに記しても、

「彪は清儉にして施しを好む。祿賜は分けて宗族に與え、家に餘財無し。」（『後漢書』列傳十六・韋彪傳）

「袁渙、字は曜卿、陳郡扶樂の人也。……渙の子の侃も亦た清粹閑素にして、父の風有り。郡守・尚書を歴位す。」（『魏志』卷十一・袁渙傳）

「綽の子遐は、善く玄理を言う。音辭清暢にして、泠然として琴瑟の若し。」（『晉書』卷三十五・裴秀傳）

「王凝之の妻謝氏、字は道韞、……道韞は風韵高邁にして、敍致清雅なり。先ず家事に及びて、慷慨すること流漣とし、徐ろに問旨に酬いて、詞理滯ること無し。」（『晉書』卷九十六・列女傳）

「脩之身を治むること清約にして、凡そ贈貺する所のもの、一として受くる所無し。餉有りて、或いは之れを受くるも、旋ち佐吏と之れを賭け、終に已れに入れず。唯だ羣蠻を撫納するを以て務めと爲す。」（『宋書』卷七十六・朱脩之傳）

のごとく、『後漢書』以降歴代の正史から「清」を含む熟語を擧げるのは、いともたやすいことである。「清」の附く評價を與えられている列傳中の人たちは、そのほとんどが當時の一般的知識人階層に屬するであろうが、王凝之の妻の例が示すように、女性にも及んでいる事實は興味深い。

成語の指示する內容は、人物の性格や生いたち、言辭、

口調、考え方から經濟的狀況に至るまで、いうなれば生活態度全てをおおっている。しかもその成語がきわめて多種多様であって、「清和」「清虛」「清貴」「清白」「清介」「清素」など枚擧にいとまがない。「清」はほとんど何に對しても附隨して、熟語を作り上げてしまうのであり、二字で成語を作るという、中國語が本來的に具有する特性を斟酌したとしても、なお濫用の感があるのはどうしても否めない。こうした現象は、人物批評の話をその賞譽・品藻・容止篇にことに多く收める『世說新語』にも顯著に見られる。

「林下の諸賢には、各おの儁才の子有り。籍の子渾は器量弘曠、康の子紹は清遠雅正なり。」（賞譽篇）

「卿は處明と茂弘を知る。茂弘は已に令名有り、眞に卿の清論に副うも、處明は親疎に之れを知る者無し。」（同）

「胤長じて又た桓宣武の知る所と爲る。多士の世に清通し、官は選曹尙書に至る。」（識鑒篇）

最初の例に引いた「清遠」こそ、俗世からかけ離れたの意で、「濁」と反對の方向に「清」が使われていると考えられるものの、第二、第三の「清論」「清通」はその「清」の意味がさして明白とは言い難い。もっとも、恐らく前者が相手の深い洞察に對する賞讃の意味を籠めているだろうし、後者が多士濟々の世に出世していったその立派さを言ったものであるだろうことは、推測がつくけれども。とまれ、「清」は一筋縄では捉えきれない多義性を帶び、多方面での使用に耐え得る柔軟性を具えているのである。

しかも、ここで注意を拂っておきたいのは、人物評價における、「清」を含む成語の品詞および文中での用法についてである。中國語の品詞分類の困難さを承知の上で敢えて挑んでみよう。『世說新語』から二番目に引いた「清論」のように、「清」は下の名詞「論」を修飾する形容詞であって、二字の熟語「清論」は名詞として主語（の場合が多い）の役割を擔うのが、一般の使用法であるとするならば、人物批評での特徵的な使われ方は、「清」が同じ品詞の「和」「貴」といった形容詞の上に附き、二字で狀態を表わす形容詞として、述語成分としての機能を果していることである。

さて後漢末期から、人物の品評を中心とする、在野の知識人による「清議」が盛況を呈するようになり、また魏の明帝の頃から世を擧げての「清談」の風潮が形成されたことはよく知られる所である。そして、その清談の背景には特權階級たる貴族社會が存在していた譯だし、貴族階層の中で名門貴族たちは、出世コースに當たる黄門侍郎、散騎常侍などの官職を、「清官」として貴びかつ獨占していったのである。(18)

このように「清」は後漢から魏晉六朝を代表するひとつの時代的氣風であり、當時の社會における（少なくとも知識人のそれにおいては）理想的な理念であった、と言えよう。そして既に述べたように、「清」の附く語句の多彩さは我我の目を瞠らさせるに充分であり、その指示する意味も多岐にわたる。纔かに「すがすがしさ」という共通項を持つだけで、中には、それさえも失われた例が散見できる程だった。してみると、陸雲の文學批評の核たる概念の「清」も、ただに同時代の一表象にすぎないのだろうか。結論から先に言えば、そうは斷言できないと思うのである。その理由を考えるためにも、ここで他の文學批評に見られる「清」の使用例を檢討してみよう。

先秦以來、文學に關する記述は決してない譯ではなく、『尚書』『左傳』『論語』などの經書の、或る部分(19)はその例として屢々引かれる。しかしながら、それらは專ら文學の社會的效用を說くものであって、文學それ自體の價値を自覺的に認識するようになるのは、三世紀魏の曹丕・曹植らをまたねばならないこと、周知の通りである。建安時代の幾つかの文學論に現れる「清」は例えば次の如くである。

「文は氣を以て主と爲す。氣の清濁に體有り、力めて強いて致す可からず。」（曹丕『典論』論文、『文選』卷五十二）

「來訊する所を得たり。文采は委曲にして、曄かなること春榮の如く、瀏きこと清風の若し。」

（曹植「與吳季重書」、同卷四十二）

前の例は、すぐれた「氣」とそうでないのとを「清」「濁」の對比によって述べたものであり、重點は「清」よりもむしろ「氣」に置かれている。後例は、吳質からの手紙の文面を清風に譬えており、華やかさ、清らかさをそれ

ぞれ春の花と秋の風とで配置した直喩である。いずれも「清」の特性は感じられない。

陸機の「文賦」になると「清」の使用は飛躍的に増加して七個所に表われ、文學批評に特有な用語としての成語も出現する。煩を厭わず登場順に全て擧げれば、(A)「世德の駿烈を詠じ、先人の清芬を誦す。」(B)「銘は博約にして溫潤、箴は頓挫して清壯なり。頌は優遊して以て彬蔚、論は精微にして朗暢なり。」(C)「或いは藻思綺のごとく合し、清麗千眠たり。」(D)「或いは言を短韻に託し、窺迹に對して孤り興る。……譬えば偏絃の獨り張るがごとく、清唱を含みて應ずる靡し。」(E)(F)「或いは清虛にして以て婉約し、毎に煩を除いて濫を去る。大羹の遺味を闕き、朱絃の清氾なるに同じ。一唱して三歎すと雖も、固より既に雅にして豔ならず。」(G)「或いは故きに襲りて彌いよ新しく、或いは濁れるに沿りて更に清し。」

一篇の賦の中でこれほどまでに「清」の字が使われている事實は、やはり刮目すべきことなのであろうし、殊に、(B)「清壯」(C)「清麗」などは、先程見た史書の人物批評の際の特徴的な「清」の成語の使用例と共通點をもち、(十九、二十ページ參照)文學批評史上、陸雲と共にその先驅けたり得る。陸機も「清」をおおむねプラスの評價の方向に用いており、その主要な原因の一つは、陸雲の場合と同じく、先述した時代的風潮であるのだろう。ただ、ここで見逃してならぬのは、陸雲ほどには「清」を重んじていない點である。「清壯」は「溫潤」「彬蔚」「朗暢」と對等の關係にあり、「清麗」は「藻思」と並置されている。對偶表現を驅使した美文という文體上の制約のせいもあるだろうが、他に對する「清」の優越性はどうも認め難い。「文賦」では、様々な文章の利點と弊害を例證するという特色を有しながら、結局は饒舌すぎず、簡潔すぎず、文飾と感情、表現と內容が調和した、いわば中庸を得た狀態を重んじる點に落ち着くようであり、そこから全體を統一するような根本概念を導き出すことは容易でない。ましてや、「彼の榛楛の翦ること勿き、亦た榮を集翠に蒙る。下里を白雪に綴るも、吾亦た夫の偉とする所を濟す。」と、雜木や低俗な歌曲をことさらに排除しようとしないのなどは、陸雲にお

ける「清」の概念と眞向うから對立するようにすら感じられる。

機・雲以後は、文學理論の書においても、「清」を含む「清遠」「清雅」「清巧」「清拔」「清靡」「清切」が頻用されるようになり、却って「清」の字義は、比較的明確に看取し得た陸雲の場合の「簡潔さ」や「斬新さ」が稀薄になったり、或いは擴大されて、すがすがしさを感じさせる、という意味を留めるだけになった。この意を完全に喪失したのか、と疑わせる位の例もままあること、先の史書や『世說新語』の人物批評で見たのと同じい。どうやら、清らかさというものは、概してプラスの方向に評價されてはいるが、判斷の基準となる概念ほどの重要性は附與されておらず、その價値は相對的なものである。ちなみに、六朝文學論の雙璧たる『文心雕龍』と『詩品』はどうか、と覗いてみるに、一方は本質的に經書的精神への回歸を說いており、片や他方では、「氣」を價値の根柢としているのであって、[20] 清らかさは、これら各おのの根幹に對する、いわば枝葉に相當しよう。[21] 從って、問題を文學批評用語たる特性的な「清」の字の頻用度という一現象に絞れば、陸雲（並びに陸機）をその實質的な嚆矢として、以下陸續と增大していくのだけれども、「清」の內容と、その各々に占める重要性を併せ檢討すれば、陸雲が「清」なる新奇さと簡約さを貴んだ事實は、やはり特筆すべきではないだろうか。

五

それでは、陸雲は何故文學においてかくも清らかさを重んじたのだろうか。その大きな要因の一つは、既述の通り時代的風潮の影響であるのだが、それだけではない樣に思われる。臆測するに、彼には資質として清を好むところ、或いは清的なところがあったのではないだろうか。もしそうだとすると、彼が無意識的にであれば勿論のこと、たとえ幾分意圖的なものを含んでいようと、[22] 文學批評の基準に「清」の概念を置いたことは、案外抵抗なく首肯できよう。

『晉書』陸雲傳は次の樣にして始まる。

——雲、字は士龍、六歲にして能く文を屬る。性は清正にして才理有り。少くして兄の機と名を齊しくし、文

章は機に及ばずと雖も、論を持するは之れに過ぎ、號して二陸と曰う。

同じく本傳からいく條かを試みに引くと、

——刺史の周浚は召せられて從事と爲りしとき、人に謂いて曰く、陸士龍は當に今の顏子なるべき也、と。

——俄かに公府の掾を以て太子舍人と爲り、出でて浚儀の令に補せらる。縣は都會の要に居り、名づけて理め難しと爲す。雲の官に到るや肅然として、下は欺く能わず、市に二價無し。

——尋いで吳王晏の郎中令を拜す。晏の西園に大いに第室を營るや、雲は上書して曰く、云々。

——時に晏は部將を信任し、諸官の錢帛を覆察せしむ。雲又た陳べて曰く、云々。

——穎の晩節は政衰う。雲屢しば正言を以て旨に忤う。孟玖其の父を用て邯鄲の令に爲さんと欲し、左長史の盧志等は並びに意に阿り之れに從うも、雲は固執し許さずして曰く、此の縣は皆公府の掾の資なるに、豈に黃門の父の之れに居ること有らんや、と。

陸雲「兄への書簡」（釜谷）

のごとく、或いは優れた德行によって今の世の顏回と評され、或いは統治の難しい事で知られた浚儀縣が彼の赴任後、亂れること無く治まり、或いは幾たびとなく不正に對して諫言している。彼のこうした傾向は、とりわけ「身の長七尺、其の聲は鐘の如」（『晉書』陸機傳）くであったという兄の陸機と比較すると、一層顯著になる。それには、『世說新語』に傳わる次の逸話が何よりも好適であるに違いない

——大勢の人がいる席上で范陽の盧志に、陸遜・陸抗は君の何にあたるのか、と諱を名指しで問われた陸機は、君の盧毓・盧珽に對するのと同じだ、と答えた。これを聞いた陸雲は顏を青くして、後で、盧志は本當に知らなかったかもしれないのにどうしてあれ程にまで言ったのか、と言うと、兄は平然として、我が父祖の名は天下に知れわたっており知らない筈はない、と答えたのだ。(23)

かくの如き兩者の性格の差異は、才能の違いとも相重なり、ひいてはそれぞれの文學觀にも大きく反映されていると考えられないだろうか。機雲兄弟の才能、個性の問題を的確に評した『文心雕龍』才略篇の表現を借りよう。「陸

機の才は深を窺わんと欲し、辭は廣を索めんと欲す。故に思は能く巧に入れども、繁を制せず。士龍は朗練にして、識を以て亂を檢す。故に能く采を布くこと鮮淨にして、短篇に敏なり。」單純な類型化が許されるならば、陸機は持ち前の豊饒な感情を前面に押し出して筆の赴くままに書き上げる長篇作家のタイプであり、陸雲の方はといえば、理知というフィルターを通して常に抑制と削減を忘れずに論理を進めていく辯論家、批評家であるといえよう。今度は鎔裁篇から引こう。「精論要語は極略の體にして、游心寡句は極繁の體なり。繁と略と謂うは分の好む所に隨う。引いて之れを申ぶれば則ち兩句は敷きて一章と爲り、約して以て之れを貫けば則ち一章は删って兩句と成る。思い贍る者は善く敷き、才の覈なる者は善く删る。」

そもそも書簡というものは普通、基本的には特定の一個人を對象に、個人的な感懷や用件を記すのであるから、非公開を原則とするのだが、それと同時にある程度の公共性をもまた許容する。殊に中國においては後者の比重がかなり大きいと言える。そして、今日我々が用いるのよりも遙かに廣義の「文學」の範疇に組み入れられる書簡は、同じ上奏文、碑銘文、および詩や賦などとは、文體の類別上で違うがゆえに、當然その内容、性格をも異にする。書簡や議論文は論理的であるべきで、詩や賦は美しくあるのがよい、[24]という主張も肯ぜられよう。陸雲には「愁霖賦」をはじめとして多くの賦や詩が殘っているけれども、それらはいずれも、特に他より抜きん出て秀れた卓越性は看取し難い。華麗な裝飾を施す詩賦よりも、論理性を必要とする文章にこそむしろ陸雲の本領が發揮されたと考えることもできよう。そういえば、陸雲は一聯の書簡の中で、詩や長篇の賦および潤いのある豊麗な表現にかけては兄に及ばない、と自ら認めている。

「久しく文を作らず、悅澤ならざるもの多し。兄爲に小しく之れを潤色すれば、佳物と成る可し。必ず留思せんことを願う。四言五言は長ずる所に非ず、頗る能く賦を作る。」

（久不作文、多不悅澤。兄爲小潤色之、可成佳物。願必留思。四言五言非所長、頗能作賦。）〔3〕

「先に講武賦を作らんと欲し、因りて大體を遠言せんと欲す。之れを大將軍に獻ぜんと欲するも、才は大文を作るに便ならず。……大文は作り難し。」

（先欲作講武賦、因欲遠言大體。欲獻之大將軍、才不便作大文。……大文難作。）〔10〕

「大類四言五言を作るに便ならず。」

（大類不便作四言五言。）〔14〕

「張公の箴・誄は自ら五言詩に過ぐる耳。[25] 但だ雲は自ら五言詩に便ならず。」

（張公箴誄自過五言詩耳。但雲自不便五言詩。）〔22〕

「今作る所を視るに、乃ち極まれりとは謂わず。更に自信あらず、恐らくは年時あれば間ま復た之れを捐棄せん。徒だ自ら困苦する爾。兄小しく潤色を加うれば、便ち出づ可からんと欲し、極めて文を作るを苦とせず。」

（今視所作、不謂乃極。更不自信、恐年時間復捐棄之。徒自困苦爾。兄小加潤色、便欲可出、極不苦作文。）〔16〕

四言詩、五言詩はあまり得意でなかったらしく、到る處でそのことを辯明している。また、兄の陸機に潤色を加えてくれるべくひたすら請うているように、豐潤な詩文を創ることはどうやら不得手だったらしい。勿論このことは、省約を尊重する陸雲の性向、嗜好と無關係ではあるまい。先に『文心雕龍』鎔裁篇を引いた通り（二十四ページ參照）、陸雲自身は、創作に際して熟考を重ねた結果、削減する方向にむかう。

「九悲・九愁は、連日鈔除して、去る所甚だ多し。才本より精ならず、正に自ら此に極まる。兄小しく之れに定むるを爲さんことを願う。」

（九悲九愁、連日鈔除、所去甚多。才本不精、正自極此。願兄小爲之定。）〔11〕

また、押韻や轉句といった、詩賦の細かい表現規則についての配慮も書簡の中に見える。押韻の際に資する書物は當時まだ無かったのだし、陸機・陸雲は吳地方の出身であるゆえ、方言の點でもかなり腐心したと思われる。

「徹と察は皆日と韻せず。思惟すれど得る能わず。願わくは此の一字を賜わらん。」

（徹與察皆不與日韻。思惟不能得。願賜此一字。）〔17〕

「李氏云う、雪は列と韻するも、曹は便ち復た用いず、と。人の亦た復た云う、曹は用う可からずといえれば、音は自ら正しきを得難しと。」

（李氏云、雪與列韻、曹便復不用。人亦復云、曹不可用者、音自難得正。）〔29〕

轉句については、陸雲は四言詩の場合四句ごとに、卽ち同韻を二字用いるだけで換韻するのがよい、と主張している。

「亦た常に云えらく、四言の句を轉ずるは、四句を以て佳と爲す、と。」

（亦常云、四言轉句、以四句爲佳。）〔12〕

しかしながら、四句ずつで目まぐるしく換韻するのは、新鮮さを感じさせるかもしれないが、むしろ清新を通り過ぎてしまって、せっかちな印象を讀者に刻みこんでしまうだろう。なお、劉總によれば（章句篇）、賈誼や枚乘は四句で換韻し、反對に劉歆や桓譚は百句もの長きにわたって同韻を續けており、曹操は賦について換韻を奬めているという。

ところで、これまで取り上げてきた陸雲の文學論は、ほとんど表現上の問題が中心であったし、それも一貫して簡約を宗としていた譯だが、こうした些かの偏重についての自己意識は無かったのだろうか。いや、そうではなく、

「往日文を論ずるに、辭を先にして情を後にし、[26]絜を尙んで悅澤を取らず。嘗に兄の張公父子の文を論ぜしことを道うを憶い、實に自ら得んと欲す。今日便ち其の言を宗とせんと欲す。……雲今意うに、文を視るに乃ち清省を好んで、以て尙うる無からんと欲す。意の此に至れば、乃ち自然に出づ。」

（往日論文、先辭而後情、尙絜而不取悅澤。嘗憶兄道張公父子論文、實自欲得。今日便欲宗其言。……雲今意視文乃好清省、欲無以尙。意之至此、乃出自然。）〔11〕

を見れば、彼の文學觀の變化を窺い得る。以前は、措辭を先行させて感情を二の次にし、簡約を重んじて潤色を輕視していた。しかし張華父子の文學論に接して、始めて開眼したと言う。清省を殊更に重要視して內部からの感情が高まってきてごく自然に文字に結晶するのを待つ態度を表明している。ここには、「辭」と「情」、「潔」と「悅澤」のそれぞれ二つの對立概念が顯現しており、彼は主として表

現の面に、それも簡潔な表現にのみ傾倒していた事實を自ら認めているのだ。そして、この新しい文學觀に從おうとする決意の結果か、それ以前に書かれた批評なのかは判然としないが、

「兄の前の表は甚だ深情遠旨有り、高文を耽味す可き也。」

（兄前表甚有深情遠旨、可耽味高文也。）〔35〕

のごとく、表現技巧のみならず、心情や內容から評した個所も見られることを附け加えておこう。

さて、第一章に述べた通り、この三十餘通の兄に宛てた書簡が揃って機雲兄弟の晩年に書かれたものだとすれば、彼らを取りまく周圍の狀況[27]をいま一度參勘しておかねばなるまい。二十歲頃祖國吳の滅亡に遭い、その後十數年してから晉の都洛陽に入る兄弟は、文壇の大家であった張華からは厚く遇せられたものの、他の文人貴族連中には、田舍者として冷遇されたのだ[28]（先に引用した范陽の盧志とのやりとりもその一つである）。その後陸機は、元康、永康、永寧、太安と年號が變化する晩年の十年足らずの間、策謀が渦卷き、クーデターが勃發して政權が目まぐるしく交替する王族同士の內紛、いわゆる八王の亂に卷きこまれて死に至る。また陸雲の方も、人民には慕われていたが、不正を憎むその性格ゆえか、屢々直言して、立場を異にする貴族たちに恨みを買ったりした。こうした中にあって、機雲兄弟が互いに相手をより强く信賴し合っていたことは言を俟たない。それは文學創作の方面にも及び、「士衡は文成れば、輒ち弟をして之れを定めしめて、他人を假らず。」（張溥『陸淸河集』題辭）と指摘されるような關係にあったのである。往復書簡に展開される作品及び作家の批評、押韻や轉句の問題への言及は、さながら文學創造の舞臺裏、或いは創作ノートを見せられるようなものであり、これほど細かい點にまで內容が及んでいることは、陸雲がいかに腹藏なく自己の文學觀を披瀝していたかを如實に物語ると共に、逆に彼ら二人の周圍の狀況がどれほど逼迫していたかをも自ずと明らかにしている。この尋常でない狀況こそが、陸雲をして兄への信賴と依據を强くさせ、武人でありかつ偉大な文人である兄が傑出した文學作品を產み出すようにと、期待

と激勵の意味をこめつつ、天性の批評眼をもって作品の長所短所を指摘させたのであろう。やや不自然とも思われるほとんど絶對的な兄への賞讃も、陸雲が兄に、よりすぐれた作品を創作させるべく誘導してこれらの書簡を書いたのだと推測すれば、もっともだと頷くことができる。

いったい文學作品は、程度の差こそあれ不可避的に虛像を含むのであり、現實生活における作者像と作品から受けるイメージとは一致しない場合もある。例えば豪放な人間や輕薄な人物が纖細と感傷の極みを盡くした詩を作るように。特に六朝期の賦や詩は美文全盛の影響もあってか、作品から作者の思念や價値觀を推し當てるのは容易でない。しかしながら、陸雲が兄に宛てた書信ではほとんど虛飾の要素を排除していると見てよいだろう。さればこそ、彼は自分のこれまでの眞率な文學批評の誤りを改めようと表明したのであるし、更にまた陸機宛以外の手紙の文體と內容は、兄への書簡と比較してみれば、このことの旁證たり得る。

かくして、陸雲が文學において清らかさを重視したことは、時代背景と微妙に重なりつつあると同時に、彼自身に根ざす內發的な獨自の文學觀の表われでもある點を見落してはならないだろう。そして、文學批評史的觀點から見ると、「清」の使用の系譜に位置づけるのが可能なこと、既に見てきたごとくである。ただ、これらはあくまで陸雲の文學理論、文學認識のかたちであって、彼の文學作品そのものに清約さ、清新さが投影され、活用されているかどうかは、詩人、文人としての才質と關わるものであるし、改めて檢討することが必要なのは、言うまでもあるまい。

〔注〕

(1)　劉勰『文心雕龍』序志篇「詳觀近代之論文者多矣。……又君山公幹之徒、吉甫士龍之輩、汎議文意、往往間出、並未能振葉以尋根、觀瀾而索源。」ほか。

張溥『漢魏六朝百三家集』の『陸清河集』題辭に「士龍與兄書、稱論文章、頗貴清省、妙若文賦、尙嫌綺語未盡。」

(2) 郭紹虞『中國文學批評史』上册（商務印書館、一九三四年）羅根澤『魏晉六朝文學批評史』（商務印書館、一九四三年、のち、『中國文學批評史』一、古典文學出版社、一九五七年に收む）朱東潤『中國文學批評史大綱』（古典文學出版社、一九五七年）黃海章『中國文學批評簡史』（廣東人民出版社、一九六二年）

(3) 『新書』は斷片が類書から蒐められて『玉函山房輯佚書』子編道家類に收められている。

(4) 『西晉文紀』と『百三家集』とは、書簡數の上では一致しているが、內容的に一部分異なり、張溥は前者の二通目を二つに分斷し、四通目を削除している。ただしその他の個所はほぼ同じである。汪士賢本は、四部叢刊本と大體同一で、二十二通目と二十三通目を併せているために、一通の減少を見ている。

四部叢刊本の錯簡を宋本によって訂正すると（四部叢刊初編縮本參照）

〔1〕→〔5〕　〔5〕→〔10〕
〔10〕←〔5〕
〔22〕→〔5〕
〔22〕←〔10〕
〔10〕→〔22〕
〔22〕→〔35〕

となる（番號は四部叢刊本の順序を表わし、横方向の矢印はその手紙の途中で換わることを示す）。なお淸の陸心源『潛園總集』の「羣書校補」卷六十七に「陸士衡士龍兩集、明嘉靖中陸元太重雕宋本爲最善、余近得宋慶元間徐民瞻刊本、乃知卽陸本所祖。以之互校陸本、尙多脫誤。今以宋刻爲主、而注陸本譌字異文于旁、……」とあるが、『陸士龍集』は卷七から卷十の途中まで宋本が缺けているという（「與平原書」は卷八にある）。便宜上、四部叢刊本を「本集」と呼び、底本として、引用個所の最後に附した括弧內の數字は、この排列順序の番號を記すことにする。

(5) 陸機が陸雲及び顧榮と洛陽に上った年については、姜亮夫『陸平原年譜』（古典文學出版社、一九五七年）四十三、四ページ參照。

興膳宏氏「左思と詠史詩」（『中國文學報』第二十一册）に、「三都賦」序を書いた皇甫謐の歿年による考證がある。

(6) 「茂曹碑」について、茂曹という人物は寓目の及ぶ範圍では未詳。文の前後關係から推測して、ここでは、死んだ茂曹に對して陸機が書いた碑文、の意に解したけれども、或いは茂曹が書いた碑のことなのかもしれない。もしそうだとすれば、茂曹の碑文が蔡邕のそれにまさっているという內容になる。

(7) 本集は「初述征登樓前耶佳」で甚だ讀みにくい。ひとまず嚴可均に從ってこのようにしておく。

(8) 陸雲の書簡中に見える「張公」は殆ど例外なく張華を指している。今の場合もそうだと思うが、ただ、「仲宣文、實得張公力。」という表現は、前の時代の作家を今の時代のそれで譬えている譯であり、不自然さが殘ることは、認めざるをえない。

(9) 本集は「感丘其弔夷齊辭不爲偉」であるが、明らかな誤りと思われるので訂正しておく。

(10) 曹丕（子桓）の書というのは、恐らく後に引用する「與吳質書」（『文選』巻四十二）を指すのであろう。

(11) 陳祚明『采菽堂古詩選』巻七。

(12) 葛洪『抱朴子』佚文に見られる機雲兄弟への熱狂的な崇拜には、いささか目に餘る感もあるほどだ。『全晉文』巻百十七からいくつか例を擧げる。

「嵇君道問二陸優劣。抱朴子曰、吾見二陸之文百許卷、似未盡也。……方之他人、若江漢之與潢汙。及其精處、妙絕漢魏之人也。」

「嵇君道曰、每讀二陸之文、未嘗不廢書而歎、恐其卷盡也。陸子十卷、誠爲快書。其辭之富者、雖覃思、不可損也。其理之約省、雖鴻筆、不可益也。觀此二人、豈徒儒雅之士、文章之人也。」

「陸君深疾文士放蕩、流遁遂往、不爲虛誕之言、非不能也。陸君之文、猶玄圃之積玉、無非夜光。吾生之不別陸文、猶侏儒測海、非所長也。卻後數百年、若有幹跡如二陸、猶比肩也、不謂疏矣。」

(13) ここを本集は「兄文過子安、子安諸兄賦復不皆過、……久觀兄兄爲耳。」に作っているが、今、改める。

(14) 成公綏が賦に秀でていた事實を示す記述や評價が、例えば『晉書』本傳や『文心雕龍』にある。

「成公綏字子安、……少有俊才、詞賦甚麗、……張華雅重綏、每見其文、歎伏以爲絕倫。」（巻九十二・文苑傳）

「太沖・安仁、策勳於鴻規、士衡・子安、底績於流制、……亦魏晉之賦首也。」（詮賦篇）

(15) 「及雲之論機、亟恨其多、而稱清新相接、不以爲病、蓋崇友于耳。」（『文心雕龍』鎔裁篇）

(16) 陳壽のとは別に、陸機が『吳書』を撰していたことは、あまり注目されていない。しかしながら、姜亮夫・前揭書百一、二ページにも指摘するように、陸雲の書簡から確かにその事實を窺い得る。

(17) 本集は「正自情省、無煩長。」だが、「情」は「清」の誤りではないかと判斷して改める。

(18) 青木正兒博士「清談」（『青木正兒全集』第一卷）、宮崎市定博士「清談」（『アジア史研究第三』）等參照。

清官の成立過程とそれが「清」と意識されるようになったことについては、上田早苗氏「貴族的官制の成立——清官の由來とその性格——」（『中國中世史研究』、東海大學出版會）がある。

(19) 「詩言志、歌永言。」（『尚書』舜典）

「仲尼曰、志有之、言以足志、文以足言。不言、誰知其志。言之無文、行而不遠。」（『左傳』襄公二十五年）

「子曰、小子、何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名。」

（『論語』陽貨篇）

これらの他にも、『毛詩』大序などが引かれる。

(20) 興膳宏氏「文心雕龍と詩品の文學觀の對立」（『吉川博士退休記念中國文學論集』）参照。

(21) 清らかさが作風の一つとして相對化された位置にあることは、體性篇ほか参照。

(22) もっとも、彼には、簡潔を尚んで潤澤を遠ざけていた自分自身の偏向に氣附き、今後改めようとする記述があるから、それまでは殆ど無意識的に自己の生來の好みに據っていた、と考える方が妥當かもしれない。このことについては後に述べる。

(23) 「盧志於衆坐、問陸士衡、陸遜陸抗、是君何物。答曰、如卿於盧毓盧珽。士龍失色、既出戸、謂兄曰、何至如此、彼容不相知也。士衡正色曰、我父祖名播海內、寧有不知。鬼子敢爾。」（方正篇）

(24) 「蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗。」（曹丕『典論』論文）

(25) 本集は「張公藏誄自過五言詩耳。」だが、この部分に續いて、箴や誄のことを述べているから、多分「藏」は「箴」の誤りであろう。

(26) 本集は「尚絜而不取悅澤嘗憶兄道張公文子論文。」このうち後者の「文」は明らかに「父」だろうが、問題は「絜」の方である。『文心雕龍』定勢篇は「又陸雲自稱、往日論文、先辭而後情、尚勢而不取悅澤。」に作り、黄侃『文心雕龍札記』は「尚勢、今本陸士龍集作尚潔、蓋草書勢絜形近、初訛爲絜、又訛爲潔也。」という。もっとも、「辭」――「情」、「勢」――「悅澤」の對應關係に注目すれば、むしろ「潔」の方が意味はより明白である。

(27) 姜亮夫・前掲書、高橋和巳氏「陸機の傳記とその文學」（『中國文學報』第十一・十二册）参照。

(28) 兄弟が入洛した時に與えられた官位は郎中（八品）であった。宮崎博士『九品官人法の研究――科擧前史――』百八十ページ参照。

陸雲「兄への書簡」（釜谷）